The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	卒修了生からの寄稿
Author(s)	
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 139-145
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70915
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

卒修了生からの寄稿

『語文』百輯に寄せて

松　原　秀　江

『語文』に発表した論文は、たかだか四篇にすぎない。その中でも「薄雪物語とものあはれ」（第35輯）と「仮名草子の文学観」（第48輯）は、『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』（和泉書院）に収め、博士の学位論文の一部になった。そろそろ著書を出しなさいと田中先生に云われ、出版社も御紹介下さって、でき上がった本をお送りすると早速、学位が取れるから申請するようにと、熱心にお勧め下さった。渡辺守邦さんもお送りした時の礼状で、すぐに学位の申請を、と云って下さったにもかかわらず、その頃博士の学位を取る人はまだ余りいなかったこと、私がもらう前に、もっと力のある人がいると思ったこと、そして何よりも文学に関わる者が、そんな勲章で身を飾るような世俗的な行為は、恥ずかしいと思ったことなどの理由で、いつものように笑って逃げ廻っていた。だが、本を出して一年と少したった頃、今は亡い日野龍夫さんが、広島であった学会の帰りだったと思う、申請するようにと厳しく云って下さり、十年に一度出るか出ないかと云われる人も、取ってはいないと繰り返すと、彼はいらなくても貴女には必要だと云われ、ああそうかと思い決めたのだった。今は亡い母がとても喜んでくれたこと、そして以後、既に学位のある若い理工系の人達に、脅かされることもなく、落ち着いて研究に専念できるようになったのは、感謝の言葉もない程、ありがたくうれしいと今も思っている。

『語文』と云えば、いつまでも論文発表のできないことにあせりが出て、院生用の機関誌をとの声がなかった訳ではない。0.1の論文は10集めなければ1にはならない、0はいくつ集めても0、マイナスは足せば足すほどマイナス、と聞かされて、震え上がったのは、就職してから間もないお酒の席でのことだが、『語文』の価値を下げまいと、田中先生が御自身の御論考を、『語文』に繰り返し発表されて、孤軍奮闘されていたことは、院生の間でも共通の認識だった。近世文学会でも信多先生に、散れ〳〵群るな〳〵と云われ、西高東低と云われた当時の京大国文の人達の活躍を横目で見ながら、先生のお言葉通り阪大国文も、やがては点から線へ、線から面へと念じて、勢いの面でも方法論の面でも、恐ろしい先生方の前で、四～五年も相手にされないような発表はするまいと、みんな無我夢中だったと思う。

西洋の文化・文学がもてはやされる中で、日本独自の方法論や価値観を見出そうと、時間もお金も体力もかけて、資料の発掘・収集に専念した国文学も、今やグローバル化の中で、いつしか世界文学の一つにすぎない日本文学になり、やがて日本文化になって、それさえも大学によっては消えかねない現状の中で、資料収集の熱意は、国内から国外に及び、止むことがないように思われる。だが、「物語は人を育てる」「読むことは生きること」などと云われ、「読む力は生きる力」であるなら、読む力はその生きる

力に支えられ、虚構の文字や文学の世界は、それが人間存在の根幹に関わるものであればある程、豊かで深い、時には「悲哀の涙」に彩られた実体験を経た後の事実の裏づけなしには、姿を現わさない真実を隠し持っているのではなかろうか。母は勿論、論文や資料を読み合い、共に机を並べて切磋琢磨し合った知人や先輩、後輩までも失った今、時々そんなことを切に思うのである。

（まつばら・ひでえ　兵庫県立大学名誉教授）

『語文』の敷居

片岡利博

昭和四十五年度入学生が教養課程を終えて学部へ進学したのは、三回生の後期になってからだった。大学紛争のせいで教養部の最終試験が延び延びになっていて、進級が認められなかったからである。後期になって初めて国文研究室に足を踏み入れたときはとても緊張した。ずらりと並ぶ辞書や叢書に囲まれた部屋で院生の方々が勉強の話ばかりしておられ、ここには自分の居場所はないという気がした。語文三十輯が出たのはそれからすぐのことだったが、池上禎造先生の「椿字の和用法」を拝見してさらに大打撃を受けた。授業で接する池上先生はもの静かで、私にはいちばん取っつきやすい先生だったにもかかわらず、諸先輩が「怖い、怖い」と言っておられたわけがちょっとわかった気がした。のみならず、語文のバックナンバーを見ると、名のみ聞く錚錚たる先生がたのお名前が目白押しである。自分はまったく場違いの所へ来てしまった、と思った。

かろうじて仕上げた卒論に合格点をいただき、あのとき就職の決まっていた高校へおとなしく赴任していれば、阪大は私にとっては自動車教習所と変わりないものだったと思う。修士論文も惨憺たるものだったが、博士課程になんとか入れていただけた直後に、田中裕先生から、卒論の一部分をまとめて次の語文に出すよう仰せがあった。即座に「無理」と思ったが、ともかくも草稿を作って柿本奨先生に見ていただいたところ、案の定、手が付けられないほどたくさんのコメントがついて戻ってきた。それから何度書き直しをしたのだったか。いよいよ、もう無理、と諦めて、恐る恐る田中先生にお出ししたところ、「これでいいですよ」とのこと。それでも、二・三箇所は考え直すよう、ご指示があった。まさに四苦八苦。初産の苦しみとはこういうものなのであろうか。そうして世に出たのが、三十三輯に掲載された「『狭衣』の一品宮―構造論の試み―」である。内容に自信がなかったので、語文は抜刷りを作らないのを口実にして、誰にもコピーを送らなかった。そのことが、あとになってから一悶着起こすことになったが、その顛末は小著『物語文学の本文と構造』に「補説」として書き記しておいたとおりである。

苦しかった最初の経験のせいで、私にとって語文はずいぶん敷居が高く、編集方からお声がかからない限り投稿など考えたこともなかったが、自発的に投稿してみようという気になったのは、

六十四輯に寄せた「宮中管弦の遊び場面のヴァリアント―『狭衣物語』異文の形態学的研究―」だけである。

にもかかわらず、顧みると、拙い論文を五篇も掲載していただいている。なんとも、おおけない限りである。

（かたおか・としひろ　神戸松蔭女子学院大学教授）

『語文』と『詞林』

堤　和博

求められたのは『語文』をめぐるシンポジウムに資する情報であるが、『語文』関連に特化した情報は持ち合わせていないので、『詞林』創刊頃の思い出を書かせていただく。伊井先生と仁木君がパネラーとなられることでもあり、『語文』と『詞林』の関係も話題にして欲しいと思うからである。

私の『語文』デビューは「島津忠夫教授退官記念輯」（53・54輯・一九九〇年三月）に後藤昭雄先生が寄せられた「島津先生の御退官に当たって」と題する文章に出てくる「T君」の言葉であるが、それはさておき、論文としては「歌語りから「とよかげ」の部へ―『一条摂政御集』の好古女関連歌を中心として―」（58輯・一九九二年四月）である。これは博士後期課程在籍中に書いたもので、『詞林』には前期課程の時の「『一条摂政御集』論―「とよかげ」の部の特質―」（2号・一九八七年一一月）をはじめとして、すでに数本の論文などを載せていた。

『詞林』は御存知の通り、伊井先生が国文学研究資料館から本学に移ってこられて、主として院生の論文発表の場が必要だということで始められたものである。その伊井先生の本学着任は私が学部生の頃で、そして前期課程に進学して『詞林』2号に論文を掲載することができたのである。今から思うと、創刊号に間に合わなかったのが残念だ。

また、個々人が論文を掲載するだけでなく、『詞林』の編集も伊井先生の指導のもと院生達が行っていた。これも色々勉強になった。

このように『詞林』への論文掲載と編集作業を行うとき、恐らく私だけでなく多くの伊井門下生は、『語文』を意識していたのではないだろうか。規範にすべき最も身近にある学術雑誌として、意識しなければおかしいであろう。

少し具体的に言うと、特に私のようにまず『詞林』に論文を載せた者は、次には『語文』に載せることを目標にしたと思うのである。(注) しかし、それだけでは、『詞林』に載った論文は『語文』に載せるレベルには達していないものばかりだということになりかねない。よって、同時に、『詞林』に掲載する論文のレベルアップも皆目指していたはずである。私などが編集に拘わっている時には、他の者が書いた論文でも、査読のようなことは勿論できないので、とりあえずは校正や引用の正確さに重々気を使ったつもりである。それでも「『是則集』注釈」を出した10号（一九九一年一一月）の表紙で、「校正おそるべし」ということを痛く

思い知らされることになったのであるが……。

要するに、『詞林』が『語文』を追っかけるというような体制ができあがって今日に至るのだが、その出発当初のお話しを伊井先生にしていただき、また、仁木君が助手であった頃は、私などが編集に関与した『詞林』創成期とは違った事情になっていたのではないかと思うので、そんな点を語って貰いたいと思う次第である。また、二〇〇三年と二〇〇四年には『阪大近代文学研究』と『上方文藝研究』が相次いで創刊されたと聞く。今回のシンポジウムが、『語文』と『詞林』にこの両誌も含めた関係性を改めて捉え直し、今後四誌共に発展していく切っ掛けにもなれば幸いである。

（注）勿論前期課程から『語文』に論文を載せた院生も多いであろう。そんな中で、古代中世文学とは分野を全く異にするが、卒業論文を纏めた「滋賀県甲賀郡水口町八田方言における待遇表現の実態」を46輯（一九八五年一二月）に載せた宮治弘明さん（掲載当時は確か日本学の院生だったと思う）の夭逝が改めて惜しまれる。

（つつみ・かずひろ　徳島大学大学院教授）

学術雑誌との出会い

斎藤　理生

一九九四年に大阪大学文学部に入学し、翌年、国文学科に進学しました。まだ二回生で、演習発表さえしたことがなかった当時、一部の研究書や『国文学』『解釈と鑑賞』などは図書館や書店で手に取った経験があったものの、学術論文というものが一般にどこでどのように発表され、いかなる体裁で世に存在・流通しているのか、よくわかっていませんでした。

そのような私にとって、学術雑誌との出会いは、多くの阪大文学部生と同様に『待兼山論叢』であり、『語文』でした。なにしろ学部生時代から呼ばれてもいないのに頻繁に研究室に顔を出していたので、当時の助手の方々に労働力としての価値を認められ、会員の皆様や全国の大学・図書館への発送を手伝ったのが、『語文』との出会いだったと記憶しています。黒地に白抜きで書かれた「語文」の文字の迫力に圧されつつ、おずおずと扉を開くと、そこには執筆者や研究対象は異なっていても統一された世界が感じられ、それは『待兼山論叢』にはないものでした。

やがて研究室旅行やソフトボール大会で親しくしていただいた先輩たちが、日頃どういう研究に傾注しているのかも知りました。論文には、授業や卒論・院生発表会のようなライブの魅力とは別の、研ぎ澄まされ、凝縮された思考があることも学びました。

大学院に進学し、博士後期課程になると、自分も『語文』への執筆機会を与えていただきました。博士二年のときに、初めての論文を掲載してもらったときの喜びは忘れられません。

幸運なことに、その後も今日までに『語文』には三度書かせてもらっています。大学院を修了した直後、博士論文の一部をまと

め直した論文。就職して三年目に当たる年に誘ってもらった共同研究の一環としての研究報告。それまでとは異なる作家の研究を本格的に始める契機となった論文。ふり返ると、自分にとって節目となる時期に書かせてもらっていることに気づきます。

現在私は文学・語学研究者の少ない職場で働いています。専門とする近代に関してはともかく、日本文学・国語学を広く見渡す機会はなかなか得難いのが実状です。そのような自分に活を入れてくれるのが、半年に一回届く『語文』です。指導してくださった先生方も先輩も後輩もいない環境でのんびりしていると、『語文』に研究を促されている気がします。

今後も執筆する機会が得られれば、専門領域において新たな知見をもたらす論文を書くことはもちろん、かつての自分がそうであったように、母校の次代を担う学徒が最初期に接する学術雑誌であることを肝に銘じたいと思います。そのようにして書く論文が同時に、昔のように頻繁には会えなくなってしまった方々に向けても、最近はこのようなことを調べたり、考えたりしているという報告の働きもしてくれればと願います。

（さいとう・まさお　群馬大学准教授）

『語文』の思い出

李　育　娟

二〇〇四年一月の真冬に、私は、「大江匡房と唐文の受容―「楚越の竹」という表現をめぐって―」というテーマで大阪大学国語国文学会の大会で発表しました。その後、発表したものを『語文』に寄稿しました。それはちょうど博士論文を出して間もなくのことでした。大会の論文は、二〇〇四年七月の『語文』（八十二輯）に掲載されました。

これで、私はようやく三年間の博士後期課程を終え、大阪を離れ台湾に帰国しました。博士課程の修了は、私とって一つの段階の終わりだけではなく、この人生における長～い長～い「学生」という身分にもついにピリオドを打ちました。

帰国後、半年くらいの時間をかけて就職活動をし、就職先が決まり仕事も軌道に乗ってから、研究を再開しました。博士課程では院政期の学者、大江匡房の『江都督納言願文集』や『本朝神仙伝』などの作品を研究主題として調査してきましたが、もう少し大江匡房研究の続編をしてもいいという思いを持ち始め、彼の晩年の著作『江談抄』を研究対象にしました。その後、数年間にわたって『江談抄』に関する調査や問題点について、いくつか自分なりの答えを出し、論文も何本か仕上げました。現在は、平安晩期の成立とされた『注好選』に着目し始め、敦煌の啓蒙書や類書との関連に関心を寄せています。

卒業してから、研究対象が変わっても、いまだに留学時代に阪大で学んだ知識や調査の方法で漢学の研究を続けています。ただし、大江匡房から卒業して、研究対象を広げようとしましたが、少し違った時代、専門範疇の文献や書物を紐解くと、自分が正確

に判読できるのかという大変な思いをしました。新たな分野に足を踏み入れることで、あらためて自分の勉強不足を痛感しています。と同時に、新たな文献に接触することで、院生だった自分の知識の貧困さをも実感してきました。

このたび、『語文』百輯という特別記念号の刊行を際に、卒業直前の大会発表のことで思い出した気持ちを記そうとしました。それは、学生という身分が終わっても、勉強は終わりません、という初心です。

（り・いくけん　台湾師範大学助理教授）

知的熱気

朴　美　賢

『語文』が今年で一〇〇輯を迎えると聞いた。私は八三輯と九二・九三輯に採録させていただいたことがある。八三輯には二〇〇四年、外国人招聘研究員として書いた「日本書紀の二人称代名詞について」が、九二・九三輯（二〇一〇年蜂矢真郷先生退休記念特輯）には韓国に帰国した後書いた「日本書紀における「吾」「我」の使い分けについて」が採録されている。両方とも博士論文の一部として纏めたもので、日本で留学していた熱き阪大時代の思い出でもある。私は阪大で交換留学生（正式には特別聴講学生）として一年間、大学院生として五年間、外国人客員研究員として四年間、計一〇年間研究室でお世話になった。一〇年間を振返って見れば、一番印象に残るのは初めて阪大の研究室に行った日である。その日は研究室中間発表会の日で、会場である当時の第一会議室は席が足りないほど学生でいっぱいだった。中間発表会の風景は時間にとても厳しく、鋭い質疑応答を交わす姿はまさしく「知的熱気」であり、これから成るべき自分の姿でもあった。

留学当時の中間発表や院生発表会では、自分の専攻である国語学以外にも文学の発表も聞けるシステムは大変新鮮で、今になって見るとあれほど多様な考え方や研究法を纏めて聞けるチャンスがあっただろうかと改めて思う。韓国に帰国してからは自分の専攻だけではなく、時には日本そのものに意見を求められる場合もあるので、阪大の中間発表会や院生発表会から得た情報は今の自分にとって滋養分になっている。

そして『語文』はその年の「知的熱気」の結果物であり、その意味でも留学生として『語文』に採録されたことを光栄に思っている。

私は漢字の用字法、類義字について関心をもって主に日本書紀を中心にする上代の文献を対象に研究しているが、池上禎造（一九七二）「椿字の和用法」（『語文』三十輯）を読んだとき、一つの漢字について文字史、語彙史、言語生活史から眺めていることに目からうろこが落ちる気分だったことを未だに覚えている。

そのような研究のためには緻密な考証はもちろん網のように常に広く言葉を観察する姿勢が必要であることを阪大時代を通して学び、その第一歩を中間発表会や院生発表会と『語文』から学んだと思う。

（パク・ミヒョン　釜山大学日本研究所専任研究員）

『語文』と国文研究室の思い出

高　兵兵

阪大を離れて六年あまり経ちましたが、国語・国文研究室で過ごした六年の日々のことが、今でも鮮明に脳裏に残っております。後藤昭雄先生のもとで勉強させていただいた年月は、今までの人生でもっとも充実したもののように思います。

二〇〇一年四月、留学生として修士課程一年に入学した私は、まだ右も左も分からない状態でしたが、初めて後藤先生の指導を受けに研究室をお伺したところ、いきなり先生に「あなたは今修士課程に入ったばかりだが、僕は五年後に退官するので、博士号を取りたいなら、今すぐ計画を立てて頑張らないと間に合わないぞ」と言われました。その日から五年間、博士論文のことを考えない日はありませんでした。

最初の一年は、演習やゼミを受けても、皆さんが何を話しているのか、レジュメに何が書いてあるのかも分からなくて、「これで五年で学位が取れるわけがない」と、自分を責めたり泣いたりすることが何回もありました。しかし、日々の演習やゼミでの発表、そして毎年恒例の院生発表会、中間発表会、公開審査会などで鍛えられることによって、自分でも驚くような進歩を遂げてまいりました。二〇〇六年に学位が授けられる時まで、五年の間で七本の論文を公開しました。中には、当然ながら、『語文』への寄稿も入っております。

毎年一月に行われる国語国文学会の総会は、研究室の最大の行事でして、ふだんお目にかかることのできない有名な先生もお見えになりますし、在籍の院生がその場で発表できるということは、一人前の研究者として先生方に認められることに等しく、皆が目指す第一の目標でした。私も学位を取る直前に、発表者に選ばれ、先生がたと皆さんの前で自分の研究について報告することができました。外国からの留学生でこのようなチャンスが与えられたことを、今でも光栄に思います。

阪大国語・国文研究室は自分にとって家のようなところでして、一緒に勉強した皆さんも家族のように思います。帰国して六年の間、学会で二回ぐらい日本に行きましたが、二回とも研究室に寄りました。新しい顔が多い中、知り合いの先輩や後輩に会うと、とても懐かしく、嬉しいことでした。先生がたにお会いできたことも何より嬉しかったです。また、中国においても、学会に参加すると、ときどき同じ研究室出身の方にめぐり会えます。その際はなおさら嬉しく感じられます。

今後とも機会があれば、「家」に帰って総会に参加させていただき、『語文』にもまた論文を載せたいと思っております。最後に大阪大学国語国文学会と『語文』がますます発展しますよう、お祈り申し上げます。

（ガオ・ビンビン　西北大学教授）